

はじめに

近年、交通網の発達、高速化によりヒトは72時間以内に世界中ほとんどの地域に移動できるようになりました。また物流の国際化、大量輸送の進展、さらには地球温暖化による気候変動なども加え、感染症問題は今後ますます拡大、複雑化し、人類に対し大きな脅威として襲いかかることが予想されます。いつ、いかなる国においても安全とはいえず、さらなる警戒を強めていく必要があります。

近年の海外の状況としては、西アフリカにおける「エボラ出血熱」の流行はいまだ終息にいたらず、中東において発生した「中東呼吸器症候群（MERS）」は、隣国、韓国にまで侵入し、わが国においても緊急に水際対策が求められる等大問題となりました。さらに、東南アジアにおける「鳥インフルエンザ」等の新興感染症のほか、「結核」や「マラリア」等の再興感染症の流行も懸念されます。

国内の状況としては、去年は約70年ぶりに「デング熱」の国内発生例が、東京都を中心に数多く報告されました。本県の状況としましては、国内発生と見られる「デング熱」の報告はありませんでしたが、ダニ媒介性疾患である「日本紅斑熱」や「重症熱性血小板減少症候群（SFTS）」が多く報告されました。

このような状況に対して、感染症対策の一層の強化と充実を図るため、健康危機に関する情報を常に把握し、異常事態を早期に探知するなど、迅速な対応を行うことが求められています。

感染症発生動向調査事業は、これらの感染症対策を的確に行うための中心的な役割を担っており、実施主体である当保健製薬環境センターの役割と責任はますます重要であると考えております。今後も状況の変化に応じ、迅速かつ的確な調査と情報提供を行えるよう、感染症情報センターと検査部門との連携のもと、事前対応型の業務推進に努力してまいります。

このたび、平成26年における徳島県の感染症情報を整理し、年報を作成しましたので、感染症対策の資料としてご活用いただければ幸いです。

なお、この事業の実施にあたりましては、県内医師会、定点医療機関をはじめとする関係者のご協力を頂いております。この場を借りて深く感謝いたします。

平成27年10月
徳島県立保健製薬環境センター
(徳島県感染症情報センター)

所長 山崎 邦明

目 次

1. 感染症発生動向調査について	1
2. 全数把握対象感染症患者報告状況	
(1) 全数把握対象感染症の過去5年間の届出状況	5
(2) 各疾病の届出状況	
① 結核	6
② 腸管出血性大腸菌感染症	7
③ A型肝炎	8
④ 重症熱性血小板減少症候群	8
⑤ つつが虫病	9
⑥ デング熱	9
⑦ 日本紅斑熱	9
⑧ レジオネラ症	10
⑨ アメーバ赤痢	10
⑩ ウイルス性肝炎(E型、A型を除く)	10
⑪ 急性脳炎	11
⑫ 劇症型溶血性レンサ球菌感染症	11
⑬ 後天性免疫不全症候群	11
⑭ 侵襲性インフルエンザ菌感染症	11
⑮ 侵襲性肺炎球菌感染症	12
⑯ 梅毒	12
⑰ 破傷風	12
⑱ 風しん	12
3. 定点把握対象感染症患者報告状況(週報)	
(1) 過去5年間の報告状況	13
(2) 各疾病の報告状況	
① インフルエンザ(鳥インフルエンザ及び新型インフルエンザ等感染症を除く)	14
② RSウイルス感染症	15
③ 咽頭結膜熱	16
④ A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	17
⑤ 感染性胃腸炎	18
⑥ 水痘	19

⑦	手足口病	20
⑧	伝染性紅斑	21
⑨	突発性発しん	22
⑩	百日咳	23
⑪	ヘルパンギーナ	24
⑫	流行性耳下腺炎	25
⑬	急性出血性結膜炎	26
⑭	流行性角結膜炎	26
⑮	細菌性髄膜炎	27
⑯	無菌性髄膜炎	27
⑰	マイコプラズマ肺炎	28
⑱	クラミジア肺炎	28
⑲	感染性胃腸炎(ロタウイルス)	29

4. 定点把握対象感染症患者報告状況(月報)

(1)	過去5年間の報告状況	30
(2)	性感染症患者報告状況	
①	性器クラミジア感染症	30
②	性器ヘルペスウイルス感染症	31
③	尖圭コンジローマ	31
④	淋菌感染症	32
(3)	薬剤耐性菌感染症患者報告状況	
①	メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症	33
②	ペニシリン耐性肺炎球菌感染症	33
③	薬剤耐性緑膿菌感染症	34
④	薬剤耐性アシネトバクター感染症	34

5. 病原体検査検出結果

(1)	ウイルス検査結果	35
(2)	細菌検査結果	36

6. 資料

(参考資料) 徳島県感染症発生動向調査事業要綱